

# 海軍 航空部隊

## 予科練秘話

石川県 中村 敏夫

### 予科練志願のころ

止むに生まれぬ当時の少年の心境として、予科練を志願し、合格したが、私は家庭内でどんなことが起きていたか知らなかった。父の死後（戦後）、母、長姉が残された一家について知る限りのことを語ってくれた。これら当時の経緯の裏話を参考に父の回想として記すことにした。

敏夫が唐突に「海軍の少年飛行兵を志願したい」と、口を切ったのは、昭和十八（一九四三）年六月の中旬ごろだった。山本五十六元帥の国葬

が行われた直後だった。まさか本気ではないだろう、しかし冗談とも思えない。平常は親も子も無口であったから、どこまで本心なのか、親として子の心がつかみかねた。

行けば必ず死につながるような飛行機乗りに単に行けとは言えないし、家の事情もあるので、ワシは「許すわけにはいかんぞ」と断念することを命じた。

再び海軍志願の話を切り出してきたのは、七月に入るなりだった。何か追い詰められたような目つきで、ワシに迫ってきた。「どうしても、飛行機乗りを志願したい。何とかウンと返事をして、許してもらえんか」と。ワシも、その異常さに押されはしたが、ここで甘い返事をしては、取り返

しのつかないことになると思ひ説得を決意した。

「お前は、高等科の二年になったばかりだが、もう四、五年もすれば、徴兵検査があり、いやでも兵隊に行かねばならん。それなら皆が行くんだからよいが、今はちよつと早い。今日まで、お前の成長を楽しみに頑張ってきたワシらの身にもなつてほしい。それに村の友達は、誰も兵隊を志願する者がおらんのお前だけが、なんでそんなことを言いだすのだ学校の先生に、親がどうしても許してくれんと言え」と、説き伏せ納得させようとしたが、それに応えて息子は、「友達と一緒にしてくれるな、ワシにはワシの行く道がある」と言つたが、それ以上のことは反論しなかつた。

納得し志願を断念したのかと思ひながら、夏休みも終わり、忙しい秋の取り入れも手伝つてくれて無事終えた。海軍志願は諦め、忘れ去つたものと思ひ込んでいた矢先の十月下旬、村の親類が一大事とばかり家に飛び込んできた。「その息子が、海軍を志願して合格しとる。お前ら知つとる

が、知らんが、うちの新聞に名前が載つとるぞ」、地元紙ではないが大手新聞の地方版を見たというのだ。

しかし、他人かも知れないので、本人に直接聞こうと学校からの帰りを待った。「お前、海軍を志願して、合格したというのは本当か」の詰問に、息子は観念したのか「間違いない」と白状した。ワシは後頭部を大ハンマーで一撃くつたごとく、一瞬目の前が真暗になった。晴天の霹靂へきれきとはこのことだろうか。

話を聞くとこうだった。願書の締切は九月末日、どうしてもという気持ち捨て切れず、親に言えば反対されるし、提出の期限は迫るし、切羽詰つて九月の終りごろ、トートトート(父)もカーカカーカ(母)も農作業に出ている留守を狙つて、仏壇の中に置かれていた認印を取り出し、押して学校の担任に渡したという。たてえ親のものでも盗用は悪いと十分知りながら、あえて願書に押したとのこと、万事休すの思ひがした。

もはやこれを取り下げざる手段はないだろうか、また、その手段を取ったときに、息子は今度どんな手に出るだろうか、思いあぐねる日が続くうち、第二次試験のために、舞鶴の海軍航空隊に出頭せよ、との書状が届けられた。「そうか、飛行機乗りは、適性がなければ、最終的には合格しないのか、これに落ちれば良いのか」一部の望みに、やや先が明るくなってきた。「あんまり頑張らずに試験を受けてこい」と、十一月上旬舞鶴に向う息子を送り出した。世の中に息子の不合格を願う親があるだろうか、これも今のワシの気持ちから止むを得ない。しかし、息子の様子は、絶対に合格してみせるといふ気概にあふれているようだ。またしても悶々とした日が続いた。

ワシとしても、成り行きに任せていてはらちがあかないので、口の上手でないワシの代理として、在所内へ嫁いでいる次女に頼んで、学校へ掛け合に行ってもらった。学校では親の承諾の下に受験したものと思っていたので、この事実を知り連

日にわたり職員会議が開かれたらしい。

戦局いよいよ厳しい折、海軍当局より市を通じて学校へ、海軍少年飛行兵への応募を、一人でも多く出すように督励されており、協力しなければならぬが、親の承諾のない生徒までも送るわけにはいかない。さりとて、海軍という絶対的な權威を持つ組織に渡った生徒を、いかにして取り戻すかに、実りのない議論の続くままに日は流れた。

市の兵事課にも、この話は持ち込まれたが、どうにもならなかったらしい。それからあらぬ校長は十二月三日付けで転任し、新校長が着任したが新しい展望は開けなかった。

昭和十九年一月十八日、ついに最後の通告状が届けられた。「海軍飛行兵ニ採用ス 八月一日三重海軍航空隊ニ入隊スベシ」この採用通知を見たときは、ついに来るべきものが来たかと、がくつと体の力が抜けてしまった。仕事も手につかず厩裏端で、カーカと共にひとりで落ちる涙を払うことなく泣いた。

予科練合格は家門の誉れ、これを喜び祝いの言葉の一つも掛けてやるべきだが、そんなことは我が家の場合どうしてもできないならば、息子の前で涙だけは見せずにいたい。その代わり居ない所では思い切り泣こう、そんなことをカーカと共に誓い、息子の前では素知らぬ顔をきめこむことにした。

学校の担任は、この事件の責任を取ったのか、職員室の重苦しい雰囲気嫌気がさしたのか、二月に入ると学校を辞任し退職してしまった。そして息子が海軍に入った後の九月に、自らも陸軍の一兵として、千葉県の部隊へと赴き、校長コースを歩んでいた教職を棒に振るなど、これが戦争というものなのか。

#### 押しかけ面会

息子は戸籍の上では四男である。普通なら木ツ葉叔父であり、方言で「カリモギ」と呼ばれる末っ子で、どこへでも好きな所へ行けと言えるのだが、我が家では兄三人が共に夭折ようせつ、たった一人育

った貴重な存在の男だった。姉は二人いるが、息子の物心ついたときには、既に他家の人となっていた。家の跡取りと農業をさせねばと、一日でも早く学校を卒業してくれることを待ち望んでいたのだ。

ワシは六十二、カーカは五十七で既に腰が曲りかけていた。今の人たちより、あのころのワシらは、うんと老けこんでいた。白髪が生えたジイサンと腰の曲ったバアサンの、二人だけの寂しい生活が始まるのか。飛行兵といえ、百パーセント生きて帰って来ない危険極まりない兵隊であるが故に、この先どうなるのか、いくら考えても明るい見通しの立つ筈もない。

四月二十五日、ワシは今までどこへも連れて行つたことのない息子を誘い、蓮如忌で賑わう福井県の吉崎御坊へ赴いた。間もなく海軍に行く息子と、連れ立つことは再びないだろう、と思うとちよつと遠い所へ行ってみたくなつた。それと、今日まで仏様の前で手を合すことのなかった息子に、

仏様のご恩というものを悟ってほしいし、どこにいても、必ず仏様が身を守って下さるということを知ってほしいという親の愛情であり、軍人となる息子へのはなむけの一日であった。

刻々と入隊の日が迫る。せめて入隊のために家を出るときは、作り笑いでもよいから、笑顔で息子を気持よく出そう。いつまで反対していても仕方がない。我が子を兵隊に出している親はたくさんいるのだからと、諦めるようになった。少年といえども、海軍に入って立派な軍人となり、お国の役に立ちたいという強固な信念を持つ人間に、育ってくれたことを、むしろ喜ぶべきかも知れないと思うようになってきた。

七月三十日午後、村の人たちを集ってもらい、ささやかながら酒肴を用意し、氏神様の前で壮行を祝うと共に、前途の武運を祈願してもらった。海軍に行けば、これが今生の別れになると思い、三重県の航空隊まで、ワシは一緒に行き送ろうと決意をした。息子は親が連れ立ってくるのは嫌だ

と断ったが、ワシは絶対に行く。隊門に入るのをワシはこの眼で確かめる。

三十一日昼、息子は石川県から、同時に入隊する人々と共に、隊の中に消えていった。十四歳の少年は、見送る親のワシを振り向きもしないで：

家に帰ってカーカに、「わりあ、駄で別れるときに、よーよー泣かなんだなあ」と、言ったら「今までに、よー泣いたから、もう涙は涸れてしもうて、搾っても出る涙は無かった」と応えた。息子のいなくなった部屋を整理していたら、愛用の机の中から一冊の雑記帳が出てきた。何か難しいことが書いてある。七言絶句の漢詩というのだろうか。訳して書けばこうなる。

祖国日本存亡ノ秋 一身ヲ不願ズ大空ヲ志ス  
赤心ノ胸中ヲ人ハ知ルヤ否ヤ

我ハ南海ノ決戦場ニ征ク

習ったことのない漢文、おそらく見よう見まねで作ったものだろうか、一種の遺書であった。そ

の固い決意を胸に秘め、少年飛行兵になるべく予科練への第一歩を踏み出した息子よ、一日も早く役に立つ海軍の軍人になってくれと、願わずにはおれなくなった。

入隊して一週間ほど過ぎたころだった。郵便配達人が小包を届けてくれた。息子が着いていた服やシャツやらが、不用となって送り返してきたのだ。うれしかった。今はかぐことのできない息子の匂いの沁みた衣服だ。無性にうれしかった。配達にきた郵便配達人が、息子の匂いを運んでくれる仏様のように輝いて見えた。うれしさの余り郵便配達人を家の中に招き入れ、冷たいお茶を一杯飲んでもらった。

その後も、息子からの便りは、ワシらに直接に手渡ししてくれた。「息子さんからの便りだよ」と一言添えての配達、そして一休みしての色々な話、老夫婦二人きりの寂しさを、この郵便配達人と話をする事で紛らわした。

海軍に入って二カ月経つと、面会が許されると

聞いていた。二カ月の間を指折り数えて待った。八月と九月、そして待ちに待った十月になった。面会許可の案内が、いつ来るのか一日千秋の思いで待ったが梨のつぶて。十一月になっても一向に來る気配がなく、待ちの緒が遂に切れた。

來ないなら、こちらから出向いてやろう。乗り物に減法弱くすぐ酔うカーカも、面会にだけは絶対に行くと言い、死んでもよいから連れて行ってくれとすがる。十八日の夜行列車に乗り三重県に向った。一度行つて勝手知つたる三重海軍航空隊に着いたのは、忘れもしない十一月十九日の昼ごろだった。

隊門の番兵に事情を話すと、その衛兵詰所に行けというので、おずおずと足を運ぶ。所属する分隊と班に息子の名を告げ、「ぜひ面会をさせてほしい」と頼んだが、「だめだ」の一点張り。さすが軍隊という所は固い。しかし、ここで引き下がったらワシらの負けだから、もっと粘ってみようと思つていたら、貫禄十分な偉そうな人（衛兵

伍長)が現われた。今はこの人にひたすら頼むしかない。

「頼まぬ衆生は助けられない」と、いうではないか。ここは一番土下座してでもよいではないか、ワシとカーカは土下座して、「会わせてくれ、このままでは帰るに帰られん」と、涙ながらに頼んだ。もう見栄もクソもあるもんか。

衛兵伍長も人の子、人の親、老夫婦の涙の頼みに憐憫れんぴんの情を催したのか、「少し待て」と行って受話器を取り、どこかのだれかに電話を始めた。副長か、はたまた分隊長か、返事を待ち遠しかった。

「面会は許可できないが、隊内見学ならよろしい。間もなく案内役の班長が来るので、待機して置いて下さい」隊内見学で、ちらっとでも息子に会えるかも知れない。望みが叶えられそうだ。待つことしばし、やがて案内役の班長が自転車であつてきた。

「手荷物は荷台に載せて私が運びますので、あ

なたたちは後へ付いてきて下さい」と、手際よく自転車の荷台に風呂敷包みを載せてくれた。息子に会えたら食わせようと思った折箱のカイ餅と、スルメ二枚、風呂敷きを解かずとも、中味は触れるだけで見当がついた様子だった。腰の曲りかけたカーカの足に合わせて、ゆっくりゆっくり歩む。

午後の課業がもう始まったのか、隊伍を組んだ若い集団だが、物凄いスピードで駆けてくる。もしやその中に、息子が混ざっているのではと注意しながら見るけれど白一色の服に、同じ色の帽子をかぶっているの、全員が同じ人間に見えて、息子なんてとてもじゃないが見分けがつかず、困ったもんだと思いつながら歩いていくと、班長が「ここが中村練習生の生活している兵舎です。中へ入って下さい」と言つて、手荷物と一緒に分隊士室へ案内してくれた。

そこには、既に連絡がついていたらしく息子が待つていてくれた。白い服を来た若者。紛れもな

く我が息子だ。一瞬感無量でワシは立ちすくんだ。分隊長は、「面会時間は十分間、食い物は与えな  
いで下さい」と告げて部屋から出て行った。

親子三人水入らずの貴重な一刻である。お互いに喋ることは余りない。ワシは息子の元気な姿をみるだけで十分だし、カーカも見違えるようになった息子の、頭から先までを何回か繰り返し眺めていた。息子もワシらの姿に満足した様子だ。「カイ餅を持ってきたが、一つ食わんか」「いや、食いません」そっけない返事、腹の中へ二つや三つ入れても、何の証拠も残らないのに、相変わらず要領の悪い奴だ。「スルメがあるが、要らんか」と言うと、それはもらおうと素早く上着の下へ押し込んで隠してしまった。どうして食うのだろうか  
と、ちよつと心配になった。

和やかな一刻もあつという間。戸ががらりと無情な音を立てて開けられ、分隊長が、「時間で  
す。午後の課業が始まっているから、中村練習生はすぐ行くように」。息子への愛を込めて作った

カイ餅は、食わなかったもので、そっくり分隊長に差し出した。「これは預かっておく」と、手に受取ってしまった。後で班長達と一緒に食うのだろうか。「中村練習生、帰ります」。さっと敬礼をして、早くも兵舎を後に駆け出していった。親たるワシらにろくな別れの挨拶もせずに……。

我が子にして、我が子に非ず、国に捧げた赤子というものか。三カ月余りの海軍での教育は、言葉も行動もすべてを変えてしまった。親と子の絆は切れなくても、はるかかなたの遠い存在になった息子。会えたのは嬉しいけれど、海軍という大きな組織の、小さな小さな歯車の一つになってしまった息子に、一抹の寂しさがよぎった。それでも元気に一人前になってくれるのを願うのは、やはり親の愛情なのだろうか。予科練として十五歳の息子に、次に会う日はあるのだろうか。  
以上のように、父は私の志願について語っていた。

特攻志願のあとさき

厳しさを増す戦局とは裏腹に、予科練としての教育は順調に進み、昭和二十年一月末には第一学年の課程を修了。第二学年に進み、操縦術と偵察術の専攻に分かれての勉強中に沖縄に戦火が点じられ、教育を中断し静岡県藤枝航空基地に派遣されたが、敗退が濃厚となった五月下旬に、神奈川県第二相模原航空隊に転隊、待ちうけていたのは本土決戦に備えての、弾薬貯蔵庫とも聞いた地下壕の構築作業でした。

毎日の穴掘り作業を続けている折に、親の反対するのを押し切ってまで、予科練に身を投じたのは何だったかを考えることもあり、航空決戦に参加すべく、飛行機搭乗員になるためだったのにと、目的と現実の落差に、不信の念を覚えることもありました。

六月中旬、先任教員より突然「総員整列！」の号令が発せられた。一日の作業終了時を狙っての鶴の一声である。

掘っている穴の上の台地の平らな所に集合。「誰

かミスをしたのかな、久しくなかった罰直でも始まるのかな」と思いながら、指示通りの横一線に並んだ。今から何が始まるのか不安と緊張感が入り交った一刻が過ぎ、総員がそろったのを見届けた先任教員は、「内科で入室以上の診断を受けたことのある者は、帰ってよろしい」と口を切った。これで何人かは帰途についた。

次にどんな言葉が出てくるのか、まだまだ緊張が続く。ついで「一万メートルを泳ぐ自信のある者は、一歩前に出ろ」。こう言ってジロリと一瞥。常日ごろの鋭い眼差しが、今日は更に鋭さが増して見える。

先任教員が、あまりにも唐突に、（一万メートルを泳ぐ自信）と言い出したので、私自信も咄嗟の判断に迷った。（この山の中で、泳ぐとは何事だ。一万メートルは泳いだ経験はないが、泳いで泳げんこともないだろう。それに、この山の中で今すぐテストをする訳でもないだろう。海軍に入る前に、近くの海でタッピー遠泳したこともある

ので、何とかなるだろう) こう断定しながら一歩前に出た。時間にして十秒ぐらいだったと思う。この間いかけに一万メートルを泳ぐ自信ありと、一歩前に出た者は十人余りだった。

前任教員は、一歩前に出た者の顔を確認して、「前になかった者は、帰ってよろしい」と令を下した。「ワアッ」と歓声を上げ、一斉に山を下りて行った。残つてもろくなことのないのが、今までの通例であった。(あとはバツタか、前支え)の罰直しか残っていないからだ。まして鬼の前任教員の前から逃れるのだから、歓声を上げる嬉しさも理解できる。「お前たちはよく残つてくれた。この中から特攻隊行きを選抜するから、後ほど教員室に来るように」と、手短かに告げ解散を命じ、総員整列から解放された。

いよいよ私たちの乙飛二十三期にも、特攻隊の番が回ってきたのだ。「特攻隊」には、私たちが入隊した時に、指導練習生としての十九期生が、選ばれて退隊されたし、その後も、十九・二十期

生が、特攻隊要員として出発するのを何回も見送っている。前任地の藤枝基地でも、沖繩に向う特攻機を見送っているので特攻というものは、どんなものかよく理解しているつもりである。「生きても帰れない、死しかない兵」であることを。

一歩前に出て残った以上、今更戻る方法もなく、「早かれ遅かれ、我々は死を以って国に尽す以外はないのだ。いさぎよく志願しよう」こう腹に決めると、足取りも軽く山を下ることができた。

兵舎に帰ると早速ながら「話は何だった」と、一万メートルを泳ぐ自信のない連中が聞きに集ってきた。「残った者から特攻行きが選ばれるのだ」と、こう話の内容を説明すると、たちまち兵舎に知れ渡り、蜂の巣をつついたように大騒ぎになった。「そうならそうと、初めから特攻行きの話をしてくれれば良いものを、前任教員も人が悪い」と、気の早い者は直に教員室に駆け込んで行ったし、中には指先を切り血書を以って「特攻志願」として持参した強者もいた。

兵舎内は、熱気に満ちた雰囲気包まれ、しばらくの間は教員室に、「ぜひ特攻隊に行きたい」という連中の行列ができた。

一歩前へ出た者も、出なかつた者も、神奈川県の中で、連日の穴掘りでくすぶっているよりもより新鮮な特攻行きを希望する者が多かつたのではないか。入隊したところには「花の予科練」に、今は「華の特攻隊」に、当時の少年たちをひき付けて止まなかつたものは、一体何であつたらうか。

私はもちろん有資格者であるから慌てない。教員室の空くの待つて入室した。他の教員は誰もいない。先任教員が机の上に書類を置き（おそらく身上調書だろう）入室した者に対して質問をさされている。私の直前の練習生には、「君は長男だが、家のことは心配ないか」と聞かれている。「弟がいるから安心です」と答えている。私は思わず「弟がいる」の返事をうらやましく思った。

私は戸籍上は四男だが、兄も弟もいない。年の離れた姉が二人いるだけである。私の番になると

「君は親も年配だし、男は君一人だな、心配ないか」と、一番痛いところを突かれた。一瞬、故郷に在わす年老いた父と母の顔が脳裡をよぎった。「心配ないか」と念を押されてみれば、やはり気にかかる。

親を一度は捨てて海軍に入ったものの、私が死ねば、年老いた両親の面倒を誰が見るだろうか、寝た子を揺り起こすような質問だが、今日までそんな事を一度も考えて見なかつたのに。しかし、今はそんな心配している場合ではない。「特攻に行かなければ、生き残る保証ができますか」先任教員にそう反論した。してやっつたりの返答に、ほの暗い教員室の裸電球が、一瞬きらめくように明るく見えた。

当時は、特攻も死、しからざるも死を覚悟しなければ、本土決戦は成り立たなかつたはずである。毎日の空襲しかり、日本のどこに安全な地があつただろうか。それならば特攻という死を選ぶのは、かつて海軍を選び、予科練を志願した者の、当然

進むべき道であろう。

特攻の種類は何であるか知らないけれど、若い個の命で国を守ることができるなら本望ではないか。自分で自分の命を守れないのが、戦争の宿命である。「私は、一万メートルを泳ぐ自信が絶対にあります」と、他の練習生との差別化の意味も含めて、もう一度強調した。「よし分かった帰ってよし」と、先任教員に言われたが、その時は「死」などということ、さして深く考えなかった。十五歳はまだ若かったからであろう。

翌日からは、何事もなかったかのように、戦備強化作業は続けられていたが、特攻隊選抜の件は音沙汰もなく、穴掘りは完成に期限があったのか、半突貫体制となり、神奈川県に来てから一日の休日もなく、懸命に掘り進んでいた。

六月二十一日、私は作業中に右足の薬指の付け根に、一センチほどの切り傷を負った。たいしたことはないだろうと、手持ちのメンソレータムを塗ったのだが、風呂に入ったのが悪く、傷口から

ばい菌が入り、朝履いていた靴が、夕方には履けなくなるほどに足の甲が腫れあがり、ついに医務科の世話になる破目になった。化膿せず赤く腫れた状態で、自由に動けない病人になってしまい、松葉杖も支給されず、足の甲を冷やせと軍医は言うけれど、洗面所まで遠くタオルを濡らしに行けない。

切開手術をしたが思わしくなく、二十八日に分隊員に別れて一足先に、原隊である三重航空隊に帰り、再手術を受けた。今度は松葉杖はもろろんのこと、白衣にベッド、そして優しい看護婦の世話を受けながら、外科病棟の一員としての生活を余儀なくされた。

七月に入ると二相空での作業も完了したと、分隊員が三重に帰ってきた。七月五日に、二十三期初の水際特攻隊「伏竜」の壮行会が、剣道場で開かれ横須賀方面に向け壮途についたと聞かされた。さて、私だが足の怪我で入室していたためか、完全に特攻要員から外されてしまったらしい。一

カ月余りの寢室暮しでは止むを得なかったが、残念さと寂しさに治療の続く足の傷をうらみに思ったものです。あるいは、息子の無事を願う親の執念が天に通じ、足の傷も天の配慮として与えられた。

昭和十八年六月ごろから、昭和二十年八月までの、十四歳から十五歳に及ぶ青春時代の期間は短いかも知れないが、私の人生のすべてが詰っている時期であったと思う。

死んでいても不思議でないのに、八十歳に近いのに生きている。いや、生かされている。ありがたいことです。罪滅ぼしというのではないが、七十歳すぎから、地区の忠魂碑の奉賛会の世話を引き受け、慰霊のまことを捧げることと頑張っています。

#### 兵 歴

昭和十九年八月一日

三重海軍航空隊入隊、第二十三期海軍乙種飛行予科練習生、兵籍番号舞志飛七七〇九

昭和二十年三月二十二日

藤枝海軍航空基地派遣

昭和二十年五月二十八日

第二相模原海軍航空隊派遣

昭和二十年八月二十五日

復員帰郷 海軍飛行兵長

#### 【解 説】

筆者は第二十三期海軍乙種飛行予科練習生として三重海軍航空隊に入隊、昭和二十年五月、第二相模原航空隊に派遣となり、特攻隊要員として待機する。

この体験記は、ご自身のこの体験を、父親が息子に語る形で切々に記述されている。

「止むに止まらぬ当時の少年の心境として、予科練を志願し、そして合格したのであるが、家庭内でどんなことが起きていたか私は知らなかった。

しかし、戦後の父の死後、母と長姉が折に触れて知る限りのことを語ってくれ、そのことを父親の

秘話として、私はこの体験記にまとめた」と語られた。

当然、体験記の文中のワシは自称、トートは父親であって、カーカは母親で、これは金沢あたりの方言であるという。

「当時は、特攻も死、しからざるも死を覚悟しなければ、本土決戦は成り立たなかつたはずである。毎日の空襲しかり、日本のどこに安全な地があつただろうか。それならば特攻という死を選ぶのは、かつて海軍を選び、予科練を志願した者の、当然進むべき道であろう。特攻の種類は何であるか知らないけれど、若い個の命で国を守ることが出来るなら本望ではないか。自分で自分の命を守れないのが、戦争の宿命である。」

しかし、筆者は、思わぬ足の怪我で入室していため、特攻要員から外され、残念さと寂しさに治療の続く足の傷をうらみに思ったと語る反面、父親の立場から「息子の無事を願う親の執念が天

に通じ、足の傷も天の配慮として与えられたのだ」と述べられている。

現代の中・高校生の年代である十四歳から十五歳に及ぶ短い青春時代に、筆者を代表とする若者たちの人生のすべてが、ここに詰っている時期であつた。予科練生といい、海軍特別年少兵といい、はたまた多くの少年兵たちが、同じ思いで戦場に馳せ参じていた。彼らが復員したのはいずれも二十歳前であり、その若い青春時代に生死を分ける戦いを体験している。

解説者も、これまで数多くの体験者のお話を伺っているが、そのような体験が背骨となり、背筋を伸ばして戦後を生きられた姿、それが戦後復興の原動力であつたとの感慨深いものがある。

最後に、

「死んでいても不思議でないのに、八十歳に近いのに生きています。いや、生かされている。ありがたいことです」と、地区の奉賛会などで慰霊などのまことを捧げられておられる。